

～都市での新たな文化の醸成～

3

まちに生きる金沢21世紀美術館



秋元 雄史  
AKIMOTO Yuji

金沢21世紀美術館/館長

都市文化の新たな拠点として、プロセス重視参加型のプログラムを実施するなど、まちに開かれた公園の様な金沢21世紀美術館。市民や企業が参画し、美術館を中心とした独自のまちづくりの内容とは…。

気軽に足を運べる美術館

「まちに開かれた公園のような美術館」。金沢21世紀美術館は、よくこのように形容される。兼六園や城跡、繁華街が隣接する町の中心部にあり、建築家のSANAA(妹島和世+西沢立衛)が設計した建物は、ガラス張りの丸い形をしていて、正面も裏側も存在しない、どこからでもアクセスできる開放感溢れる建物だ。朝の9時から夜10時まで入ることができる。それはまさに公園を訪れるように、気軽に足を運べる場所として市民に定着している。2008年度は、年間で157万人ものお客様が県内外から訪れている。

金沢は加賀藩以来、文化芸術に力を入れてきた。江戸時代に生まれ、今に引き継がれている伝統工芸や伝統芸能は27にもなる。その中には、加賀友禊

や九谷焼、金沢漆器、加賀象嵌<sup>そうがま</sup>など、全国的に知名度を持つものも数多く含まれている。文化施設も38を数え、美術館はもちろん音楽堂、記念館や工芸施設、市民のための創作や発表が可能な工房など、多岐にわたっている。また、2008年には文化庁から「文化芸術創造都市」に選出され、2009年には国土交通省、農林水産省、文化庁から「歴史都市」第1号に認定されている。最近では、ユネスコの定める「創造都市ネットワーク」に登録された。

このような文化土壌の中で、金沢21世紀美術館は2004年の開館から活動を続けてきている。この美術館の特色は、「世界の現在とともに生きる」「まちに生き、市民とともに作る参画交流型」「地域の伝統を未来につなげ、世界に開く」「子どもとともに成長する」という4つである。特に2つ目と4つ目は、市民参加型、プロセス重視型の美術館の性格をよく言い表している。

美術館の独自の活動や展開

美術館の年間のプログラムは次のように構成されている。展示会は、企画展とコレクション展合わせて5本を専用のギャラリースペースで行っている。他にデザイン・ギャラリー、長期インスタレーションルームがあり、それぞれのプログラムを展開している。また、その場所を特徴付けるように恒久設置の作品があるのも特徴である。レアンドロ・エルリッヒ作の『スイミング・プール』は、子どもから大人までが楽しむことができる作品として人気が高い。

そしてこれらの場所で展開される展示会やイベン

トへのアクセスを容易にし、より深く理解してもらうためのプログラムにも力を入れ、そのための専門スペースを用意している。キッズスタジオやアートライブラリーだ。これらを含め様々な場所で行われるものは教育普及活動にあたるもので、ギャラリーでは一般の来館者を対象としたアーティストトークや講

演会などの鑑賞プログラム、金沢市内の全小学校4年生約4,000人を対象にした「ミュージアム・クルーズ」。他「まるびいアートスクール」、キッズスタジオが主催する「ハンズオン・まるびい」、アートライブラリーが主催する「絵本を読もう」がある。また、長期のアートプロジェクトでは、金沢市内の若者を対象とした「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」がある。組織的には学芸課が担当しているものだ。

この美術館のユニークな点は、学芸課の他に交流課というものが設置されており、そこで美術以外の音楽やパフォーマンス・アートなどのイベントから、美術館周辺の広場でのイベントまでを催している。音楽やパフォーマンス系のイベントは専門のプロデューサーが担当し、企業や市民と協力して、若手の演出家や芸術家を育てるプログラムを企画している。一方では、音楽やパフォーマンスといった専門的な企画だけでなく、市民が気軽に参加できるイベントも実施して、美術館をより身近な存在にしている。また、市民ギャラリーも併設しており、新聞社などが企画する特別展や市民が制作した作品の展示も行っている。つまり専門的なものから市民が制作したもので、様々なレベルのものが並存しているのが特色だ。だからいろいろな関わり方を選択でき、そのうちにだんだんと関わりが深まっていく。

これらの美術館の活動は、美術館の中だけで納まるのではなく、広場から町へとつながっていくように心がけている。近隣商店街との連携事業「アートde まちあるき」というものがある。入場券の半券や美術館のロゴの入ったコースターを持参すると、双方で割引になるというお得なもの。だから美術館に寄ってから町へ出たり、あるいはその逆も生まれるという仕組みだ。美術館は周辺の地域と連携し、ひとつつながりの文化的エリアを構築しているだけでなく、地域に開かれた公園であり、商業エリアを補完する存在でもある。城跡や文化施設がある



写真2、3 レアンドロ・エルリッヒ《スイミング・プール》2004

文化ゾーン、兼六園がある公園ゾーン、香林坊<sup>こうりんぼう</sup>、堅町<sup>なてまち</sup>という商業ゾーンが隣接するこの界隈を結びつける位置に美術館があり、それぞれのゾーンがうまく連結され、人の流れをつくりだしている。

美術館のプログラムの特徴

美術館が主催、提供するプログラムはギャラリー、長期インスタレーションルーム、デザイン・ギャラリー、シアター21、キッズスタジオなどで行われている。

有料のギャラリーを中心に展開する展示会では、だいたい年間3本の企画展を開催している。2008年度はロン・ミュエック展、サイトウ・マコト展、杉本博司展の個展を開催した。それぞれ世界的に活躍するアーティストの最新作の発表で話題となった。中でもロン・ミュエック展は、現代美術の展示会としては、異例の17万人を集客し、最終日には長蛇の列ができた。

現代美術が人気といっても、1本の展示会で5万人台の入場者数を継続的、安定的に作り出すことはむずかしい。そこで美術館では、他では見ることのできないオリジナルの展示会を開催することに力を入れている。これはとても手間のかかる仕事ではあるのだが、できる限り自分たちでリサーチし、企画を一から作り出している。展示会がいい結果を残せるか、そうでないかは、とてもシンプルな話であるが、内容と時期の吟味、すなわち「どのようなものをどのような時期に実施するか」ということにかかっている。その結果だと思うが、今のところ冬場の入場者数の少ない時期でも6~7万人の入場者数がある。

美術館のもう一つの特徴に、プロジェクト型の発表が多いという点がある。これは最近の現代美術の一つの特徴ともなっているプロセス重視型参加型のプログラムの実施ということだ。その理由の一つは制作時間を共有することで、作家の意図やもの



写真1 金沢21世紀美術館



写真4 「杉本博司 歴史の歴史」展2008-09年



写真5 日比野克彦アートプロジェクト「ホーム→アンド←アウェー」方式2007-08年  
日比野克彦「明後日朝顔プロジェクト21」2007年



写真6 日比野克彦「明後日朝顔プロジェクト21」2007年 観覧者日記をつける子どもたち

見方を理解しやすくするということがある。もう一つには参加した市民からすると、貴重な芸術的経験を、作家や多くの参加者と共有することができるという利点がある。この美的経験の共有という点は、プロジェクト型のプログラムのもっとも優れた点であろう。

### 明後日朝顔プロジェクト21

2007年から2年連続で、日比野克彦の「ホーム→アンド←アウェー」方式と題したアートプロジェクトを実施した。これは前述の「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」として実施されたもので、主に金沢に在住する30代までの若者を対象とし、芸術活動を通じて社会と関わり、社会的な存在として自分の能力を高めていこうというものだ。特別な技能研修ではないが、感受性や豊かな心といった人間力の向上を目標としている。アーティストと共に制作側にまわって、一つの展示会を1年間近くかけて作り上げていく。

最初の年は「明後日朝顔プロジェクト21」といったプロジェクトを4月から翌年3月まで行った。美術館の外周約350mを約2,000本の朝顔で覆うという前代未聞の壮大なプロジェクトだった。参加した若者たちは日比野克彦のワークショップに参加しながら、プランをつくること、それを実現するための組織を作るなどを通じて様々な問題と出くわして、その中から学んでいく。

小学校の授業で学んだ「朝顔を育てる」プログラムの拡大版だが、物事を大きく引き伸ばし、美術館の様々なプログラムと連動させ、外では市民活動と連動させていくと、思いも寄らないような広がりが生まれていった。

金沢市内の小中学生と一般の参加者が育てた苗1,000株と、この動きに連動して水戸、横浜、岐阜、福岡、沖縄など全国12カ所で育てた苗1,000株が美

術館に集まった。美術館に植えられた苗は、夏に向かってどんどん成長していく。それに合わせて、美術館の制作スタジオでは、日比野さんの作品が制作され、一般の参加者が描く絵がたまり、キッズスタジオでは、子どもたちの絵日記や立体作品が出来上がる。

プロの作家と一般の参加者、それも年齢もまちまちな人たちが、朝顔を中心に何かを作り描く。出来上がった沢山の作品。それに本物の朝顔の種。朝顔が季節に表情を変えるように、プロジェクトも変化しながら秋の種の収穫祭へ。予想を超える数の種は、また翌年へと引き継がれていった。翌年の朝顔プロジェクトは町の中へと広がり、金沢駅や銀行、公民館、個人の家の軒先を飾った。朝顔の種が飛散するように、人を介して朝顔の輪が広がっていった。

### 美術館の基調音「ミュージアム・クルーズ」

もう一つ、美術館活動を語る上で外せないプログラムが、金沢市内の小学4年生全児童を対象とした招待プログラム「ミュージアム・クルーズ」である。名前からも分かるように美術館を「航海する、探検する」といったイメージでプログラムが展開される。さしずめ未知の大陸を発見するように作品に出会っていくのだ。

美術館の開館年である2004年から開始されたこのプログラムは、当初、小学生全学年を対象に始まった。しかし、「子ども独特の感受性と社会性が身に付いたちょうどいい時期」と専門家が言う小学4年生を対象とするようにして、2006年に再開した。運営は教育委員会、現場の先生、市民ボランティア、それに美術館の教育普及専門員で構成されたチームによって行われる。

子どもたちには、あらかじめ学校側で、美術館での過ごし方や作品についての基本情報などが掲載



写真7 ミュージアム・クルーズ（「コレクション展I」2008年より。ガブリエル・オロスコ作品の鑑賞風景）

されている冊子が配られている。子どもたちはそれを見てから美術館に集合する。学校毎で実施し、半年ぐらいかけて、すべての学校を招待する。生徒数は100人を超えるところもあれば、50~60人のところもあるが、美術館に集合すると、そこで、だいたい7~8人の小グループになる。1つのグループに1人のボランティアがつく。

この市民ボランティアは事前に研修をみっちりを受け、それぞれに教育普及について深く考え、課題も持ってあっている。

全体を通じて言えることは、あまり上からの視点で教え諭すようなことはしない。ものを見る力を養い、自分なりにそれを人に伝えることを大切なポイントとしている。正しい、正しくないという視点はほとんどない。自分で絵を前にして興味のあるポイントを探し、それに沿って読解し、何らかの感想や意見を伝えようとするのが大切なのだ。当初、子どもたちの少々硬かった表情は、プログラムが進むごとに和み、穏やかなものになる。子ども本来の感受性を解放できれば、プログラムの伝えたいことの大方が伝わったことになる。「自分の視点から見る」ことが大切なのだ。

このプログラムは、受講している子どもたちにとって意味があるだけでなく、それに関わる美術館の職員やボランティア、先生方にとっても意味がある。「他者を尊重すること。理解する努力をすること」という現代美術の基本的な態度を改めて学ぶ機会になるからだ。私たちは様々な生い立ちや考え方や、また人種や性別の違いなどによって構成された社会に生きている。こういった違いを許容し、寛容に他者を受け入れていくことこそ、人としてもっとも大切な



写真8 まち中で実施した「金沢アート・プラットフォーム2008」より。KOSUGE1-16「どんどこ！巨大紙相撲〜金沢場所〜」2008年

ことである。子どもたちが美術館にいる風景は、他の一般の来館者へも大きな影響を与える。うれしそうに作品と向き合う姿は、時として排他的に反応する大人たちに、ものと向き合う心の余裕を伝える。人は様々である。それに対して、寛容さを持つことが人との関わり合いの始まりであり、対話の始まりである。「ミュージアム・クルーズ」は、それを伝える、言わば金沢21世紀美術館の“基調音”を形成しているプログラムなのである。

### 子どもたちとともに成長する美術館

金沢21世紀美術館の「双方向的対話型、境界を設けない広がりを持つ」といった考え方は、他にも様々なプログラムに応用されている。2008年にまち中で実施した「金沢アート・プラットフォーム2008」というプロジェクト型の展示会も、このような方向から生まれたものだ。19名の作家が参加したこの展示会は、旧市街地を中心にして、様々な場所で作品を展開し、美術館の中では生まれない新たな地域や人との関わりを生んだ。美術館の活動は施設の内外を問わず、また美術だけでなく音楽やパフォーマンスにも広がっている。音楽会やパフォーマンス、広場事業など、まだまだ紹介したいものは山ほどある。

世界の現在と生き、まちに生き、市民とつくり、そして、子どもたちとともに成長する美術館。その実践はまだまだ終わりが無い。

<写真クレジット>  
著者写真 撮影：正田千里  
写真1、2、3 撮影：中道淳/ナカサアンドパートナーズ  
写真4 撮影：木奥恵三  
写真すべて 提供：金沢21世紀美術館